

「仏像本」がブームだ。昨年後半から今年にかけ、多種多様なガイドが相次いで出版され、関連する本や雑誌の特集も目立つ。大規模仏像展などの話題もあり、各社がこぞって個性を競い合っている。

昨年秋から今年にかけてのガイド本出版ラッシュは異様なほど。「仏像の楽しみ方完全ガイド」「仏像の見方がすぐわかる本」「面白いほどよくわかる仏像の世界」「たのしい仏像」「見る、読む、わかる「仏像」の世界」等々、ここ半年で十指に余る。美しい写真と豊富なデータを備え



た図鑑のような本も多い。

そんな中、シンプルなイラストとやわらかい文章で「仏像の感じ方」を語る仏像ガーリル著『仏像の本』（山と渓谷社）が、発売半年で三刷を重ねるヒットを記録している。著者は父の死をきっかけに仏像と出会い、仕事をなげうつて「人生を仏像に捧げる！」と、一大決意した若い女性。応援するファンも多く、トーキョー やサイン会には大勢の人が集まるという。

編集を担当した山と渓谷社の武藤郁子氏は「カウンター カルチャーでも本格研究でも

ない、今の表現の仏像本を作りたかった。著者の仏像にかける覚悟と多くの人を味方に巻き込む才能も人気の理由」と話す。

新潮社の「芸術新潮」は一月号の「運慶」特集に続き、三月号で「興福寺創建1300年記念・阿修羅のまなざし」を特集した。東京国立博物館で開催中の「国宝 阿修羅展」に合わせた企画で、国民的な人気を誇る仏像の魅力を多面的に紹介。こちらも販売は好調で、米谷一志副編集長は「昔からのコアな仏像ファンに加え一般の美術ファンにも関心が広まった」とみている。

中・上級者向けには『日本の仏像』（中公新書）、「奈良の仏像」（アスキー新書）などの新書もある。異色の仏像本では鶴岡真弓著『阿修羅のジュエリー』（理論社）。装飾美術を専門とする著者が、阿修羅像の宝飾への興味から見えてくる東西文明史を若者向けに説いた。阿修羅像の胸飾は「日本人が一二〇〇年ほど前にかいま見ることのできた『世界性』」を映し出す、みごとな『装飾美』」であり「文明のつながりを教えてくれる重要な仏神」という。

和辻哲郎、西村公朝からみうらじゅんまで、長い歴史と種類のある仏像本だが、現代人の興味に引き寄せて語る視点は尽きないようだ。